

もくじ

特集：外国における展覧会

■インタビュー

海外における日本美術

東京大学教授 辻 惟雄氏に聞く

〔インタビュー構成／高田都耶子〕 4

ヨーロッパに所在する 日本美術品の現状と問題点

小林 忠 9

日本美術史研究事情

—アメリカの美術館と大学—

鈴木廣之 12

文化庁・ボストン美術館共催

渡辺明義

「王朝貴族の美術」展報告

松島 健 15

都 道 府 県 の バ イ シ	我が県の文化行政——④⑤	
	「古代出雲文化」の再生と 地域文化の振興	島根県 19
	特色ある博物館・美術館紹介——②②	
	21世紀を志向する美術館	富山県立近代美術館 22
	発見 国立劇場の夏 見つけたものはなに！ 第1回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演	24
国立劇場での高校生の夏	内木文英 26	
文化庁 だより	文化財防火デー（第37回）	28

・文化庁行事報告・ 予定	……29
・「美をもとめて」 放送予定	……29
・芸術文化振興基金 ニュース	……30
・国立劇場ニュース	……31

表紙写真

「王朝貴族の美術」展が開
催されたボストン美術館の
外観（上）とその所蔵品
（左）は馬頭観音菩薩像
（右）は平治物語絵詞
（部分）

日本美術史研究事情

— アメリカの美術館と大学 —

東京国立文化財研究所美術部主任研究官 鈴木廣之

今年の一月から約九カ月、文部省の在外研究員としてニューヨークに滞在した。数千人ともいわれるマンハッタンの日本人ビジネスマンのことを考えれば、今どき珍しくもないアメリカ生活であるし、滞在期間も長くはない。しかも、広大な国土をもつアメリカの今日の事情を等し並に論じることなどできようもない。そればかりか、さまざまな文化を背景にもらった人々の暮らすアメリカで一般論をいうのが大変むずかしいのは、海を渡ってはじめて実感できたことで、つくづく多様な国だと思つた。いまの私には、ささやかな個人的な体験を書きつらねるしかない。それとて東京での私の仕事を思えば、文化財のなかでも日本美術、それも美術史という学問分野に分類される基礎研究だから、私の体験はずいぶんかたよっているにちがいない。しかし、こうした一研究者の眼からみたアメリカの事情を体験に即して考えてみるのも、あるいは何が

しかの役にたつかもしれない。

私の場合、コロンビア大学とメトロポリタン美術館の双方で仕事をすることを恵まれ、大学では来訪研究員 (visiting scholar)、美術館では客員研究員 (research fellow) という扱いをしてくれたので、図書館などの施設を十二分に活用することができたし、その分こうした機関での活動を身近に体験することができた。大学の教育・研究活動と、美術館での人々の仕事ぶりに接したことは、華やかな美術館の展示会のいわば舞台裏を見る機会でもあった。しかも、大学と美術館とは、美術史という同じ分野の基礎と応用ということができるから、両者の関係を観察することもできたわけである。

まず、大学の方からいうと、コロンビア大学で私が親しく接したのは、日本美術史と中国美術史の教授がそろつた考古・美術史の学科、それと東アジア言語文化学科である。日

創刊の『国華』のバックナンバーが揃っているのは日本でもたいへん稀だ。こうした雑誌に目を通してあげば、日本で今どんな論文が発表され、どんな作品が新しく紹介されているのか、海の内こうの様子が想像できる。

もうひとつ、この学生の恵まれている点は、東部に大きな美術館があつて、セミナーの一環として美術館へ行き、所蔵品の調査をする機会が多いことである。メトロポリタン美術館のような近くの美術館の場合は問題ないとして、バスや列車で出かける場合は引率する教授の負担も大変だろうが、実物を見る機会とはかく勉強になるから、学生も熱心である。私の出席していた大学院向けの元時代中国絵画史の講義では、バスで二時間ほどのプリンストン大学の付属美術館へ行き、講義で論じられた作品をじっくり鑑賞する課外講義があつた。十数人の学生を収蔵庫の片隅の調査室に入れるのは美術館の側でも気を使うことにちがいないが、こうした機会をもつことが美術館にとって特別なこととは考えていないらしく、わざわざ学芸員がでてきて出された作品を前に、いっしょに議論したりする。

メトロポリタン美術館でも、そういう機会によく出会つた。あつと驚くような名品がならべられることも少なくない。そうした場合

には、一緒に見ようと声をかけてくれ、作品を前にした先生と学生たちのやり取りに耳を傾けることもあつた。大学と美術館とがごくあたりまえのように連携しているのである。

それは、美術館と大学との相互の協力体制というよりも、両者はいわば基礎と応用という関係にあつて、異質なものではないという考え方のようだ。だから、学芸員が美術館の施設をつかつて学生のためのセミナーを聞くこともある。メトロポリタン美術館では、歩いて十分ほどのニューヨーク大学アート・インスティテュートに毎週講義にでかけている中国美術と日本美術の専門家がひとりずついて、ときおり収蔵庫に学生を集めて作品を前に議論をしたりする。もうひとりの中国絵画史の学芸員は、エール大学のセミナーを受けもつていて、列車で二時間以上かかる大学から毎週学生たちがやってくる。広い収蔵庫に中国絵画の代表的な作品のならば講義は、学生にとって毎週往復五時間ほどの小旅行の負担をおぎなつてなお余りあるものなのだろう。

もつともこれには、美術館で必要なアルバイト人員の確保につながるという実質的な利点があるし、学生にとつてみても、美術館でアルバイトに雇ってもらえれば、それなりに自分のキャリアになるので、いずれはこの方

本美術を勉強しようという学生にとつて、充実した日本語のコースのある東アジア言語文化学科があるのは心強い。なにしろドナルド・キーン教授の籍をおく学科である。ここで学んでいる日本美術史専攻の学生のなかには、古文の文法解析をこなし、変体仮名を読む学生もいる。以前には考えられなかつたことである。

図書館の充実ぶりもうらやましいほどである。ここには、スター・ライブラリーという、欧文、日本語、中国語、朝鮮語で書かれた東アジア関係の書籍を収集する図書館がある。東アジア言語文化学科の学生と東洋美術など関連分野の学生がこの図書館のおもな利用者である。私の専門分野に関係する書籍にかぎつてのことだが、ふだん使い馴れた資料はほとんどこの図書館のなかで見つけることができた。しかも、書架はすべて開架式になつていて、歴史、文学、宗教、民俗といった各分野の本を見ることができ、こんな本が日本で出版されていたのかと、あわててページを繰つてノートをとるといふ、日頃の不勉強を思い知らされることもしばしばあつた。雑誌についても同様で、私の分野でいうと『国華』『美術史』『美術研究』『仏教芸術』『ミュージアム』『大和文華』『古美術』といった代表的な雑誌は、定期購読されている(一八八九年

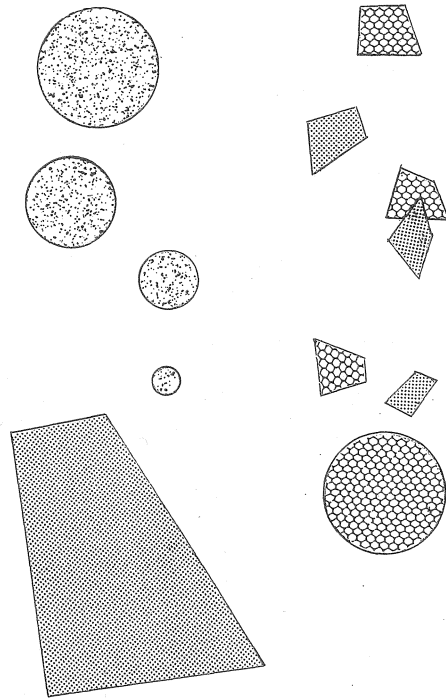
面で職をみつけないと考えている学生には何かと有利になる、という理由と動機がないではない。実際、毎週一、二回アルバイトにやってくる学生がいつも数人いて、ボランティアとして仕事をしている女性たちよりも専門的な仕事をしている。しかし、一方では、優秀な学生に奨学金をあたえ、美術館で研究活動を奨励するという制度があり、日頃の研究成果を披露する発表会があつたりする。そこで高い評価をうけ、機会にさえ恵まれれば、彼らにはキュレーター(学芸員)への道もひらけている。問題が皆無とはいえないのだから、こうした制度が機能しているのは、やはり大学と美術館とがその根本で同一の地盤にたつているという考えの証だろう。

もちろん、日本の美術館でも、実地教育をかね、学生をつれて大学の教授が美術館の収蔵品の調査にくるといふ光景は、ときおり目にするし、学芸員が毎週大学へ講義に出かけることは少なくない。しかし、セミナーのために収蔵庫を開くのは学芸員の個人的な考えなり信念からする、どちらかといえば特別な配慮だろう。大学の非常勤講師をひきうけるのも、館の仕事の延長というより個人的な活動として受け取られる種類のものだろう。少なくともこうした活動は、美術館活動のなかに制度化されるほど定着していない。ある博

物館では、学芸員の非常勤講師は業務に差し支えるので土曜日の午後にかざるなどといっているところがあるという。土曜日にかざるというのは原則論なのだろうが、教育活動が美術館業務に差し支えるという発想は、両者がそもそも別のものであるという考えである。差し支えるのではなく、両者が支え合うというのがアメリカの美術館の発想なのだろう。これには日米間の事情のちがいがあろうのだから、という反論がそうだが、そう簡単にすましてしまえる問題ではなさそうだ。研究・教育をふくめ、美術館の活動をもう少し高い視点から、もう少し広く考えられないものだろうか。

私などアメリカの美術館の余裕ぶりを見せつけられたような感じがしてしまうのだが、はつきりいって、アメリカの美術館の学芸員は暇ではない。私の目にしたメトロポリタン美術館の学芸員の仕事は、雑務に追われて忙しいといった方が正確だろう。忙しければ残業もするし、展覧会カタログの原稿の締切がせまれば土日の出勤もする。そうまでしてこうした活動にたいして学芸員が努力をおしまないのも、また、美術館が寛容に対応できるのも、美術館の活動をひとまわりもふたまわりも大きい目ながめているからなのだろう。

こうしたアメリカの美術館活動の実際と基本的な考え方については、東京国立博物館の『ミュージアム』誌の今年八月号(四七四号)に、フィラデルフィア美術館のフェリス・フイツシャー氏による興味ふかい論文が掲載された。「東西の美術館、博物館について」コレクション、教育・出版活動、特別展にみる日米の比較」と題する論文は、アメリカの美術館の現状を、おもに日米の比較から論じたおそらくはじめてのものだろう。残念ながら、具体的な内容については、ここにふれる余裕がない。ぜひ一読をお勧めしたい。



編 集 後 記

近年、我が国の伝統的な美術品、文化財の展覧会を外国において開催することが花盛りであるが、このたび、ボストン美術館で開催された「王朝貴族の美術展」も多くのアメリカ人の入場者を数えたところである。

このような試みは、ともすれば経済面だけが先行しがちで、諸外国からはなかなか理解しがたいと思われる日本の文化を理解してもらう絶好の機会であり、文化を通じた国際交流に貢献することになるだろう。逆に、真の国際交流とは文化交流を通じて初めてなされるものであり、我が国がいわば「顔の見える国」として国際社会で受け入れられるためにも、その役割は今後ますます重要となるだろう。

新年を迎え、本誌もより一層の充実を図っていききたいと決意を新たにすべく、次号であり、読者の皆様の率直な御意見をお寄せ下さるようお願いいたします。(△)

「文化庁月報」二月号

(通巻第二六八号)

平成3年1月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 ぎょうせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号

営業所 千代田区新富町西五軒町4-2

電話 (03) 33681241(代表)

振替口座 東京 91161番

印刷所 株式会社行政学会印刷所

■定期購読のおすすめ

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

定価一九〇円(本体一八四円)送料四六円
年間購読料二、二八〇円(税込・送料共)

●本誌は、文化庁の編集により発行しておりますが、掲載文は、あくまで個人の責任において、自由に書くことを建前としておりません。したがって本誌の見解は、文化庁の見解ではありません。

© 1991 printed in Japan

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業第二課・宣伝係
☎ (03) 3269-4145 (ダイヤルイン)